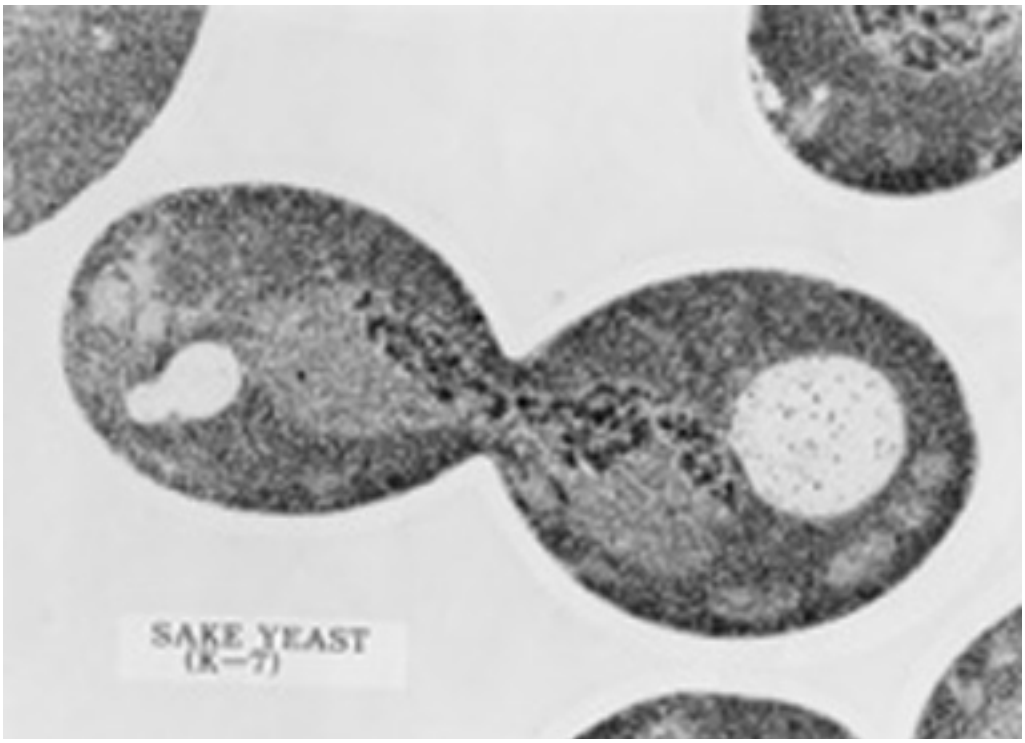
微生物を擬人化できる？

人は、生きていることを自分の脳で認識している。この代償として、死の問題が生ずる。生の自己認識は、生物の進化の流れで、どこまでさかのぼれるのだろうか。私が専門としてきた微生物界は、この問題にまず無縁である（と思える）。そのせいか、何億もの微生物を殺しても、罪の意識はなかった。

人は、他の生物を擬人化するという文化を生み出した。平安時代の絵巻物、「鳥獣人物戯画」では、生物分類学上の位置や体の大きさが違うにもかかわらず、猿や兎や蛙が人と同じ振る舞いをする。彼らはあたかも人と同じ意志を持っているようだ。こういう擬人化の例は、動物界が圧倒的で、昆虫も例外でない。しかし、植物になると例が少なくなり、微生物ではまったくないようだ。もっとも、人類になじみ深い酵母の存在が知られたのは、十九世紀になってからだが。

最近、酵母にクラシック音楽を聴かせると、美味しいお酒ができるという話を聞いた気がする。いよいよ酵母も人並みになったのか。そういえば、私も、テレビによる公開講座のなかで、他の生物の遺伝子を、無理やり組み込まれた大腸菌が、「はなはだ迷惑だ」といっているかもしれないと軽口をたたいた。

研究室に入ったばかりの学生に微生物を培養させると、なぜか例外なく、微生物の成育が悪い。そのとき、私は言った。「きみの愛情が足らないからだ！」



清酒酵母の細胞を薄片にして撮った電子顕微鏡写真